# 明日のリベンジャーは君だ

帰ってきた高浜ゆかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
明日のリベンジャーは君だ

【Ｎコード】
Ｎ１２３１Ｅ

【作者名】
帰ってきた高浜ゆかり

【あらすじ】
長きにわたる熾烈戦隊の戦いは終わった。しかし、正義は絶えることなく「新世代」へと受け継がれる――

## 第一部　男と女と、新しい命。（前書き）

熾烈戦隊リベンジャー［R］を、諸問題により作者が編集出来なくなったため、熾烈戦隊の最終回にあたる話を「明日のリベンジャーは君だ」とタイトルを改めて、何部かに分けて投稿させて頂きます。

リベンジャー［R］のパレートを倒した話から、数年が経過したという時間軸の中の作品です。これからも、よろしくお願いします。

## 第一部　男と女と、新しい命。

あれから、数年の月日が流れた―
東京都二十四区、初春。
人工島の街中には春一番の風が通り抜け、その中心部にある商店街は以前と変わらぬ活気が溢れていた。

「ふぅ……これくらいでいいかな」

食べ物や紙オムツなどがいっぱいに詰め込まれたエコバックを抱え、その青年は商店街を歩いていた。
肩にかかるほどに延びた銀髪の青年は白いジャンパーにズボンを着ており、右手の薬指にはシルバーのリングが輝いている――

「ありがとう――、結構買いだめしたから重くないか？」

銀髪の青年に、眼鏡をかけた短い黒髪女性が近づく。
切れ長の鋭い瞳をもった女性は申し訳なさそうな表情を見せ、銀髪の青年と同じくシルバーのリングが輝くその手で髪をかき上げる。
少しゆったりとしたベージュ柄の服が風に靡き、ばたばたと音を立てた――

「へへっ、いいんだよ裂子、お前一人の体じゃないんだからさ――」

銀髪の青年は片手で手編みのマフラーを巻き直すと、エコバックをしっかりと握り、隣を歩く女性――裂子の歩幅に合わせるようにゆっくりと歩き出す。

「お前も、お前の中の新しい命も俺が護るよ――」

そして、青年はもう片方の手で、裂子の掌を握りしめた――
全ての戦いは終わった。
パレートとの戦いを終えた熾烈戦隊は解散し、超人達は戦士としてではなく、一人の人間としての幸せを求めるために歩いていた。
銀髪の青年を見つめた裂子は眼鏡を上げ、俯きながらも微笑む。
「絶対に――護るよ」
そんな彼女を見つめて、青年は決意を新たにする――
かつて戦いの中にあった頃より、裂子は微笑むことが多くなったと、銀髪の青年は感じていた。
この微笑みを守りたい、今はただ、一人の男として。新しく生まれる命の、父として――

「ありがとう……あっ――今、お腹を蹴ったぞ」

冷泉裂子は少し膨らんだお腹を優しくさすると、銀髪の青年の掌を握り返す。
街にはまだ冬の名残が残っているが、こうしている限り寒さの問題は解消されるだろう。

「そうか、いよいよだな――早めに準備しといてよかった――――」

銀髪の青年はエコバックの中身を確認し、商店街を行き交う人々や店を見回す。
一通りの物は揃った、後は彼女を信じて、支え続けていくだけである。
簡単な事であった、それは今まで常に、彼が彼女にしてきた事なのだから――

「あいつらは、元気にやっているかな――」

手のひらとお腹の暖かな温もりを感じながら、冷泉裂子は雲一つない青空を見上げた。

その空の上の銀河の果てにかつて存在した、自分が生まれ育った青い故郷は既に無い――

しかし、今の彼女はこの第二の故郷の土の上で、平和な普通の女性としての日々を、胸いっぱいの幸せを噛み締めていた――――

## 第一部　男と女と、新しい命。（後書き）

作者「最初の説明通りに、この作品は熾烈戦隊リベンジャーの最後の話となります」

アイン「正月ネタとかはどうしたんだ？つうか――サッキーの横にいた男って誰だ！！」

作者「え……誰て……ちょ、まあそれはそれとして、正月ネタは半分書いたんですがボツにしました、はい」

アイン「そうなのか……というか、マジで終わるのかリベンジャー……」

作者「うん、数年の間リベンジャーに何があったのかは読者の皆様の想像にお任せするとして――皆がどうなったのかはしっかりと書くよ、それが作者の最低限のマナーだと思うしね」

アイン「解散のくだりとか、一番大切な部分を省略してる感じだけどな……」

作者「まあ、説明は入りますんで、でもよかったでしょうアイン君、裂子が幸せで」

アイン「うん、俺的にはそれだけでもう十分なんだが、読者的にはどうなんだろうな」

作者「大丈夫！次回作ではしっかりと数字（視聴率？読書率率？）取るから！！」

アイン「なんでやねん！！」

そんなこんなで今まで以上にしまりのない後書きですが、読書の皆さん、読んで頂きありがとうございます。

## 第二部　不器用な彼と、不吉な予感――（前書き）

南条真琴（なんじょうまこと）――無音の狙撃主（サイレントイェーガー）、シャドウブラック。高校生の時に家族を『パレート』に殺され、超人へ生まれ変わる事を決意した青年。性格は寡黙、だが根は優しく仲間想いの面があり、当初は北崎や裂子にしか心を開かなかったが、熾烈戦隊として闘い、不堂断児との関わりの中で人見知りをしなくなった――

## 第二部　不器用な彼と、不吉な予感――

小さな赤い屋根の一軒家の隣に作られてた小さな畑の中に、質素なワイシャツとズボンを身にまとった南条真琴の姿はあった。
彼は様々な野菜がある小さな畑の中で大根を引き抜き、汗を拭って大きく息を吐いた。
二十代の半ばに差し掛かった彼はスローライフの中で自分を見つめ直すために、現在人工約五十人、平均年齢六十五歳の島で自給自足の生活をしている。

「兄者は上手くやっているかな――皆も」

口数が少なく、金髪で外人のようにガタイが良い彼は、一見すると周囲は怖い印象を抱きがちであるが、この島に住む人々は殆どが高齢の人間であり、彼が本当は優しい事を感じ取るのにあまり時間はいらなかった。
今では力仕事などを南条に頼みに来る人達に、
「赤い屋根の南条さん」と呼ばれるくらいに打ち解けていた――

「俺も皆みたいに、やりたい事を見つけられるだろうか――」
南条は静かに呟くと、泥だらけの軍手に包まれた掌を見つめて俯く。
今まで戦いの中で生きてきた彼は、何か違う自分がしたい事を捜すまで、今はこうして自然の恩恵を受けて生き、周囲と支え合って生活するのも悪くない、と思い、毎日を生きている。

「おーい南条さんや、また薪(まき)を作ってくれんか？」

隣の家に住む作業着を着た七十代後半の男性、山下さんが南条の元

へと少し前傾姿勢のまま駆け寄る。　彼は体力的な問題から漁師を辞め、この島で魚を釣り、山菜を採りながら生活をしている男性である。因みにいち早く南条の優しさに気づき、南条に開いた一軒家を貸したのもこのであった。

「ええ、いいですよ山下さん――――明日には渡せます」

家を借りているからではなく、支え合って生きている。故に南条は快く山下の頼みを聞き、汗を拭いた。

「そうそう、南条さん……今日は早めに家に入った方がいいかもしれないよ？」

後ろで腕を組み、山下は表情を曇らせ自分の顎を触りながら静かに呟く。

「なぜです？」

少しだけ眉を潜めて、南条が問い掛ける。

「海が何か変なんだ、あとシバが頻繁に鳴くんだよ――ただの嵐じゃない、何かが来るんじゃないか……心配だよ」

シバとは山下さんが飼っている柴犬のことである、海の様子が分かるのは、元漁師の為せる技である。

南条は周囲の山や海を見渡し、瞳を細める。

　そして、少しだけ曇ってきた空を見上げて息を呑み、静かに掌を握りしめた―

「それは、不吉ですね――――ちょっと裏山を見て見ます」

南条は、軍手を脱ぐと、山下さんに会釈して背を向ける。

また――――始まるのであろうか、あの熾烈なる戦いが。

全てが終わっても、例え自分を犠牲にしても、この島の――この地球の人々を守る、そう彼は決意を新たにし、一軒家の裏へと走る。

迷いは無かった――――戦う事でしか守れないものがあるから、戦う。

ただそれだけの事であった――

そして、ワイシャツのポケットから黒い普通の携帯を取り出し、電話をかける。

何回か待受の歌が流れた後、懐かしい声が聞こえてきた。

「兄者？久しぶりにすまん、あのさ――」

南条はもしもの時を想定し、自分が一番信頼している仲間へ電話をかけた――

## 第二部　不器用な彼と、不吉な予感――（後書き）

作者「お待たせしました、第二部です」

アイン「なんか不吉な感じがしてきたんだが――――大丈夫なのか？ちゃんと終わるのか？」

作者「それは次回なんとなく分かるお！」

## 第三部　戦う男と、焼肉屋（前書き）

北崎忍深緑の業師（きたざきしのぶわざし）ホレストグリーン――
熾烈戦隊リベンジャーのムードメーカー的存在。
パレートにより忍者の仲間を失い、超人へと生まれ変わった。人あたりのよい明るい性格であるが、少し子供っぽい所もある。

## 第三部　戦う男と、焼肉屋

調理機が唸りを上げ、料理人の声が飛び交う焼肉屋の厨房で、突然鳴り響く携帯電話。

「おっ――南条か、どうした？――すまん皆、ちょっと離れる！！」

黒いスーツに身を包んだ、金色の短髪と大きな瞳の青年・北崎忍は、周囲で肉などを切っている料理人達へ右手で合図を送り厨房を後にする、そして店の裏の狭い路地で鳴り響く携帯電話を取り出した。

彼は全ての戦いが終わった後、今までの給料や手当を使い焼肉屋を開店し、持ち前の明るさや機転の効く頭を使い、そのオーナーとして精力的に活動している。

南条からの電話の内容は、再び来るであろう悪の勢力についての話であった。

北崎は少し表情を曇らせて、静かに頷いた。

「あ、ああ――――分かっているって、空の色、空気――なんか違うんだよな」

北崎は、店の壁にもたれ掛かり、ビルの間から覗く空を見上げた。

忍者であり、超人でもある彼は常人よりも数倍感覚器官が優れている、そんな彼は今、地球にパレートに近い『何か』が近づいている事を感じとっていたのだ――

「分かった、何かあったら―俺もすぐ行くぜ」

北崎は右手を握りしめると、その掌は震え、凄まじい衝撃が体中を走る。

「くっ……まだ、戦えるか――――俺は」

凄まじい戦いの中で。彼の体は断児と同じく『究極の力』を手に入

れた。しかし、その反動として、体力やエネルギーを凄まじい消費するのであった。
　実際に彼の超人の体は既に何回か修復・復元がされており、殆ど最初から使っている部位が無い状態であった。
そんな中でも彼は戦い続けてきた、なぜなら――

「いや……戦うんだ、俺が――」

―人を守るために―

「オーナー?!どうしたんですか?!何かトラブルですか?!」

店の中から白いスーツに身を包んだ長髪で小柄な青年が現れる。
童顔で瞳の大きく少年のような印象を周囲に与える彼は焼肉屋のオーナーである北崎の補佐役であり、北関東を中心に活動していた大地忍者の里の生き残り、西園寺（さいおんじ）ハヤテ丸であった。
ハヤテ丸は、俯く北崎の顔を心配そうに覗き込み。

「ハヤテ丸か？悪い……少しの間、お前に店を頼むかもしれねぇ」

申し訳なさそうな表情で、北崎がハヤテ丸に向かって小さく頭を下げる。
焼肉屋「忍者の里」は北崎がパレートにより滅ぼされた全国の忍者集団の生き残りを集めて従業員に起用している店であり、その忍者独自の独創性が巷に新しいブームを起こしている。
故に忍者を束ねるオーナーの北崎の存在は大きい、が、北崎はこのハヤテ丸という男を信頼している。

「また――闘うんですか？なら俺も――」

スーツを脱ぎ捨て、一瞬にして忍者服へ着替えようとするハヤテ丸の手を握り、北崎は一括する。
「駄目だ！！お前は店を頼む――！！」
北崎は握りしめたハヤテ丸の掌を見つめ、いつもの彼には見られない真剣な表情でハヤテ丸を見つめた。
「でも――」
北崎はハヤテ丸の手を離し、店の壁を叩く。
「この店は――――俺の夢だ！！笑顔になってもらえる焼肉を作る――夢そのものなんだよ」
北崎は生真面目で優しく、何事にも熱心に取り組むハヤテ丸を全面的に信頼していた、だからこそ、そんな彼を戦いの中に巻き込みたくなかった。
出来れば、残り少ない忍者達をもう、戦いの中で失いたくなかったのだ。

「だから頼むハヤテ丸――お前も、みんなの笑顔を守ってくれ」

忍者から戦いを奪う、それは北崎の自己満足かもしれない。しかし、彼はもう失いたくなかった。自分と同じ人々を。
故に彼は、戦いの際には一人で店を後にする事を常に考えていたのだ。
「――はい、でも、無茶はしないで下さい、オーナー……いえ！！北崎さん」
ハヤテ丸は心配そうな表情で、北崎に向かって訴えかける。
多くの仲間を失い、今まで何をすることなく生きてきた自分を拾い、人を笑顔にする喜びを教えてくれた彼を、ハヤテ丸は失いたくなかった。
北崎はそんなハヤテ丸の頭をくしゃくしゃと掴むと、静かに笑った。
「お前も頼むぜ？ハヤテ丸」

そう言うと、北崎はハヤテ丸の頭を小突き、笑いながら厨房へと戻っていく。「北崎さん……」

ハヤテ丸は少しだけ表情を曇らせため息を漏らすが、北崎の背中を追うようにして、店の中へと戻っていった――

## 第三部　戦う男と、焼肉屋（後書き）

作者「さて、あと残すは断児だけになったね」

アイン「へ？俺は？あと――新しい敵が出て来そうジャマイカ！！オイ！！」

作者「まあ、地球は何故か侵略者に狙われ易いんですよね、何故かは知らないけど」

アイン「もう本当に終わるのかよ？」

作者「終わるってばよ……皆さん、今までありがとうございます、あと少しですので、最後までよろしくお願いします」

アイン「次回も！キバっていこうぜ！！」

作者「それ――番組違う……」

## 第四部　その意思を継ぐもの

――ここは石動財閥・兵器開発研究室第七部署。
無数のコードやパソコン、そして書類や分厚い文献が散らばる小学校の教室ほどの小さな部屋。
その部屋の中で、壁に埋め込まれた巨大モニターを、その場にいた全ての研究員達は見上げていた。

モニターには、黒い特殊合金で出来た壁で外界と隔離された、だだっ広い部屋が映されている。
その部屋には煙を上げて倒れている機械で出来た怪人の無数の残骸と、各々の武器を構え、赤、青、黄色、緑、黒の五色のスーツを纏った戦士達が立っていた。

［テスト終了……チーフ、新型スーツの最終調整が終わりました］

研究室の中で、黒いバイザーを被り白衣を着た研究員が報告を告げ、小さなデータチップを手渡す。

「長かったな、ここまで――」

チーフと呼ばれたサングラスをかけ白衣を纏った長身の男性は、画面を見つめ続けながらチップを受け取り、それを握りしめた。
「よくやったね、君達に今までの技術の全てを伝えた私も鼻が高いよ――柏木くんも喜んでいると思うよ」
研究室の中で一番高齢である細身の男性のイガラシ博士は昔よりも少しだけ白髪が増えた頭をかきながら、チーフの肩をぽんと叩いた。
「ありがとうございます、ここまでやってこれたのはイガラシ博士と柏木さんのおかげです」

チーフはチップをポケットに入れると、眼鏡をくいっと上げたイガラシ博士と握手を交わし、何回も頭を下げた。
――パレートとの戦いを終えた地球は外宇宙からの敵を想定し、解体した熾烈戦隊に代わる新たな防衛手段を模索していた。
そして肉体の根本から改造を施すという超人の存在が倫理的に見直され、常人でも超人と同等の力を発揮する事が出来るパワードスーツと、新たな巨大戦力の開発が急がれていた。
そして今、その主戦力である次世代パワードスーツが完成したのである――――

「これで、あの熾烈戦隊リベンジャー達と同じように戦えますかね？」

バイザーをつけた研究員は恐る恐るチーフに問い掛ける。
するとチーフは少しだけ苦笑いすると、頭を横に振った。
「まだ、駄目だな――」
チーフの言葉に、周囲の研究員はざわつく。
バイザーをつけた研究員が問い直す前に、チーフは言葉を続ける。
すると壁に埋め込まれたモニターは何分割かされ、に少しだけ古い画質の映像へと移り代わった。

「システムだけでは我々は『終末』には勝てないんだ。最後に勝つのはそう――――人間の想いと繋がりだ」

チーフははっきりと言い切る。
そして分割されたモニターに熾烈戦隊リベンジャーの今までの戦いが映る。
何度敗れても立ち上がる五人の戦士達、その戦果や軌跡は、石動財閥や２４区の中ではまさに「伝説」として語り継がれている。
実際にここにいる研究員達も、リベンジャーの戦いを知り、彼ら

が守った地球を受け継ごうという意思を元に働いている人々ばかりである。
故に、チーフの言葉にざわついていた研究員達は静まり返り、各々の仕事に戻っていった。

「だから俺は、リベンジャーを一番知っている皆を集めたんだ――」

研究室の自動ドアが開き、胸にGのイニシャルが刻まれた赤・黄色・緑・黒・四色の制服を着た四人の人間が入って来る。明かりを消した暗い研究室であり、輪郭はよく見えなかったが、四人は若々しい印象であった。
その四人の中の一人、長い髪を左右に縛った女性がチーフに近づく。勝ち気な印象を与えている。
「大分研究者が板について来たじゃない、タケシ？」
女性の問い返すことなく、チーフは静かにサングラスを外すと、バッと白い白衣を脱ぎ捨てる。
そして、その白衣の下に着ていた四人とお揃いのデザインの青い制服が顕になった。

「今はチーフさ、そう、この――戦隊のね」

チーフは制服を靡かせ、四人の元へと静かに歩いていく。
その四人の中で一人だけ、黒い制服を着た青年だけは鼻で笑い、怪訝な表情をしていた――

―２０××年２月２４日。この日、対危険生命体用特別強化服、通称『ジェネレイドスーツ』が完成した――

## 第四部　その意思を継ぐもの（後書き）

【ジェネレイドスーツ】
新たなる敵に対して人類が開発した新戦力。今までの兵器と全く異なるクリーンなエネルギー源、ジェネレイドクリスルによって稼動する。
生身の人間が装着する事により、超人と互角の戦闘力を発揮することが出来、怪獣や宇宙人の勢力と戦う事が出来る。

## 第五部　新たな夢を捜す男（前書き）

不堂断児、彼は［究極の力］を用いてパレートの幹部を倒し、その全ての力を以ってパレート自体を粉砕した。

戦いが終わり、平和な世界を取り戻した彼は何を思うのだろうか

――

## 第五部　新たな夢を捜す男

小さな研究室の中に、二人の姿があった。
　緑色の液体が詰まった巨大なカプセルの中に、黒い髪ときりっとした瞳、そして引き締まった体の裸体の青年、不堂断児の姿はあった。
あの頃よりも少しだけ延びた髪と背丈をもつ彼は、まるで母胎の中にいるかのように液体の中で膝を抱えていた。
　カプセルの前に立つ白衣を着た柏木(なつめ)棗は書類を抱えながら機器を操作し、静かに彼を見上げた。

「断児さん、調子はどうですか？」

カプセル越しに断児に問い掛ける柏木、すると断児は微笑み、柏木を見つめて小さく手を振る。
［ああ――大分楽になってるよ、柏木……ありがとう］
部屋の中のスピーカーから断児の声が再生される。
柏木は頷きながら、俯いた。
「……断児さんの超人体の調整も、久しぶりですよね――――熾烈戦隊解散の時以来だった気がします」
熾烈戦隊の解散、それは裂子の提案であった。最初はメンバーの全員が反対していたが、やがて彼女の「真意」に気づき、渋々ながらも了承し、今は別々の道を歩いている――
　不堂断児はパレートとの戦いの後、あまりに酷使をし過ぎた超人である体の殆どを［交換］し、現在はバイトをしながら昔――家族と共に住んでいた家で生活をしている。
［あの時は本体にびっくりしたよ、で、どうすればいいかも悩んだしね――］
断児は苦笑いをする。

「平和で満たされてる時代ほど、やる事や、夢は見つけにくいんですよねぇ――でも、断児さん」

柏木は作業が終わったカプセルの中の液体を抜き、そのガラスを開放させた。

「今日はフリーなんだから、買い物に付き合って下さいね？」

柏木が微笑むと、カプセルから出て来た断児は頷き、静かに歩き出した。

これからも歩いていくだろう、自分を支えてくれる、そして今は一人の人間として守りたい存在である柏木棗と共に。

「ああ、俺も調度、何か始められないかと思って本屋に行きたかったんだ――行こうか、柏木」

今日はバイトも休みだ、断児は財布の中身を思い出しながらもバスタオルで全身の液体を拭く。

今はまだ、この平和を噛み締めて、新しい夢を見つけながら生きる。家族を失った彼にとって、この平和こそ今まで夢見て来た事なのであった――

人々が行き交う街中に、その青年の姿があった。

前髪だけ金色に染められた黒髪、赤い制服を纏った少しだけ小さな体、そして大きくて真っ直ぐな瞳をもった彼はスクーターに乗り、二十四区の商店街を走っていく。

「ふぁ～ったく疲れたぜいッ！！しっかし……眠い」

ここ最近徹夜続きだったからなぁ、と呟き、青年は首を横に振る。

「まあいいか――そう、ヒーローは愚痴っちゃいけないよな、うん」
制服の襟を正すと、青年はスクーターを加速させて、街中を走り去っていく。
その街の上空に黒雲が集まっている事を、彼はまだ気づいてはいなかった――

## 第五部　明日のリベンジャーは君だ（前書き）

無限連鎖存在　サドンハデス
機械烈将　ハガネイティブ
魔眼王　サバキメデス
竜騎団長　ラストラトス
鋼の使途　ハガネハンマー

登場！！

## 第五部　明日のリベンジャーは君だ

平和とは、人々を守る戦士にとって掛け替えのないものである。
しかし同時に、硝子細工のように脆いものである事を、我々は知っている。
二十四区の上空に収束していく黒雲は、紫色に変色を始めた。
「来たか――――我らが主、無限連鎖存在サドンハデス」
パレートとバーニングファイヤーの戦いの場にいた、ボロボロの布の服を纏った青年が上空を見上げる。
空には紫色の光を背に六つの輝く赤い光が輝き、その中心に巨大な顔が浮かび上がった。
『動き出せ――我が先兵よ、地球を我らの手に！！』
赤い髪を生やした悪魔のような形相の顔が唸るように喋ると、地面が黒く染まり、人の姿をした「それ」が浮き出てきた。
「きゃあああッ！！」
悲鳴を上げる女性の声が響く、黒く染まる地面から現れた無数の「それ」は黒い姿の戦闘員ザデスへと姿を変え、周囲の人間達を襲う。
そしてボロボロの布を纏った青年は一気に変身を遂げ、その正体を現した――
『人間どもよ聞け！！俺の名は機械烈将ハガネイティブ！！』
ジェット機のような逆三角形の顔、肩から戦艦が突き出し、戦車が積み重なったような胴体、そして大砲のような形状の足――体の全てが兵器で構成された「ハガネイティブ」という存在は商店街を闊

歩し、戦闘員達によって切り付けられていく周囲の人々を威圧する。
その巨体の影から、邪悪な瞳が現れる。

『そして我は……魔眼王サバキメデス』

ハガネイティブの影から浮き出た黒い光の触手をもった五メートルほどの巨大な丸い瞳『サバキメデス』は、ゆっくり、だが語気を強めて宣言する。
そして瞳を細め、周囲の人間達を睥睨する。

『私は破壊竜ラストラトス！！うふふッ――――いい顔ね！！』

黒い甲冑を全身に纏った竜の翼が生えた女性の姿をした『ラストラトス』は周囲の人々の苦悩の表情邪悪な笑みを見せる。
そして竜の尻尾のような形状の両刃の剣を振り上げると、ザデス達へ指示を出し、翼をはためかせはる。

「やはり来たのか――新たなる存在が！！」

駆け付けたシャドウブラックは戦闘員達を蹴り飛ばすと、Dガンを構えて一気に射撃し、周囲のザデス達を吹き飛ばす。
その一つ一つの挙動は現役の時と全く同じ鮮度であるが、彼は引き金を引き、黒いマスクによって悲しみを隠すことで精一杯であった。
「くっ……戦う事が本分だったハズなのに――実際に平和が壊れていくのがこうも早いと、どうにもなァ！！」
フォレストグリーンは叫びながらDブーメランを投擲し、格闘によりザデスの群れを蹴散らしていく。
長い戦いによってようやく訪れた平和を一瞬にして壊した新たなる敵への怒りに語気が強くなり、その動きも少しばかり感情的であ

った。
「やらせはしない――この街も、地球も――絶対に」
ホワイトウィンドはVヤイバーを構えて周囲のザデスを圧倒しながら駆けぬける、愛する者を守るために、一陣の風になって――
「リベンジャーだ！リベンジャーが来てくれたぞ！！」
ザデス達に襲われていた一般人達は、リベンジャー達を見つめて叫ぶ。そして裂子は襲われそうになっている集団を誘導しながら、リベンジャー達に向かって叫ぶ。
「こっちへ！――すまんみんな――私は――！！」
お腹の子供の事を考えると、もう戦う事ができない――
裂子は彼らを戦わせ、熾烈戦隊を解散させておきながら、戦う事が出来ない自分に苦悩した――

「大丈夫だ裂子――ぐあああッ！」

熾烈戦隊の四人の戦士は同時に叫ぶが、その瞬間、ハガネイティブ、サバキメデス、ラストラトスが放射した黒い光線が直撃し、一気に吹き飛んだ。
――
地獄谷、そこは二十四区の街はずれの巨大な崖のある荒れ地。
光線が直撃したリベンジャー達はその地獄谷の荒れ地に投げ出され、直ぐさま裂子が駆け付けた。
「くっ――」
傷ついたファイヤーレッド達は、三人も呻きながらも立ち上がる。
駆け付けた裂子は少し遠くから四人を見守り、いざとなれば自分も――と拳を握りしめる。
「大丈夫か！！みんな！！」
崖の上からハガネイティブ達が傷つき倒れたリベンジャー達。見下ろす。

『ふん、終末を油断をするからそうなる』
サバキメデスは四人を鼻で笑い、静かに笑みを漏らす。
『あーあ、強い強いって聞いたから楽しみにしてたのに……今日から地球は、ラストラトス元年ね』
残念そうに笑うラストラトスは、剣を鞘へと戻し、腕を組んで瞳を細める。

『これで終わりだリベンジャー――行け！！鋼の使途よ！』
ハガネイティブは自らの胸に手を突っ込み、体内にある無数のネジから一本だけを抜き取る。
そして引き抜いたネジを崖の下に放ると、それは周囲の大気を吸収し、人の形を形成していった――

『ふははッ！オレは鋼の使途！ハガネハンマー！！』
ネジは頭と両腕が巨大なハンマーになっている怪人――鋼の使途ハガネハンマーへと姿を変えると、その全身から無数の光線を放射する。
光線は大地を吹き飛ばしながら、リベンジャーの元へと一気に加速した。

「悩み、迷っている暇は無い！！――いくぞ北崎！南条！アイン！」
無数の光線を避けるファイヤーレッドがDブレードを構えて後方の三人に向かって叫ぶと、皆は頷き、各々の専用武器を構える。
「ああ！！」
崖の前に立つハガネハンマーへ、そして崖の上から睥睨する三体の新たなる敵へと一気に駆けだそうとするリベンジャー達。
しかしそのとき、彼らを制止する五つの声が、後方から響く――

――

「待ってくれ！リベンジャー！！」

四人を制止する声が響くと、四人と裂子は振り返る。
すると、遥か遠くの地平線から青い五人の人影が、リベンジャー達がいる採石場へと元へと一気に迫った。

『なんだキサマらは！？』

ハガネハンマーが右腕で威嚇すると、後方から現れた五人の戦士は横一列に並んだ。

「ジェネブラック！―ユウト！！」

タケシとの対立の末に今に至ったユウトは黒い強化服を纏い、両腕を構える。

「ジェネグリーン！マモル！」

宇宙人やリベンジャーとの関わりによって、信じる心を学んだマモルは緑色の強化服に身を包み、両足を開いて見栄を切った。

「ジェネイエロー！ミナキ！」

友人のアスカと共に新たな戦士になろうと決意した勝ち気な少女、ミナキは黄色い強化服に身を包み、砂埃が舞う大地を踏み締める。

「ジェネブルー！！――タケシ！！」

リベンジャー達との共闘の末に弱い心に負けない自分を見出だし、やがて来るであろう戦いのために新たなる力を開発し、努力を続けてきたタケシは万感の思いで見栄を切る。

「ジェネレッド！！――アスカ！！」

始めてリベンジャー・ファイヤーレッドと触れ合い、そして諦めない心を教えられた少年は今、赤い強化服を纏い、見栄を切る。
彼がいたからこそ、ファイヤーレッドは必殺技の特訓で諦めなかっ

た。故に彼は赤を纏う。無鉄砲だが不屈の魂は、ファイヤーレッドと同じ色に相応しい。

「無限戦隊ジェネレンジャー！！」

同時に叫ぶ五人の背後で五色の爆発が起こり、カラフルな煙が空に舞う。

そして五人は荒れ地を駆け出すと、リベンジャーを追い越し、一気にハガネハンマーへと接近した。

『ジェネレンジャー？！何者だ貴様らは！！』

ハガネハンマーは先頭を走るジェネブラックへと右腕ハンマーを振り下ろす。

「リベンジャーの戦いを継ぐのは俺達だ！――ハアッ！！」

ジェネブラックはドリルが先端に付いたナックル――ジェネナックルを構えてハンマーを受け止める。

そして一気に振り上げ、ジェネナックルの一撃によりハンマーを粉砕した――

『なっ……俺のハンマーがッ！！』

「そうよ――リベンジャーから教えてもらった、人を守る事の素晴らしさを！！」

叫ぶジェネイエローはライフル銃であるジェネランチャーを連射し、姿勢を崩したハガネハンマーの動きを制止させる。

「人と分かり合おうとする気持ちを！！」

ジェネブルーは大地を踏み締め、巨大なガトリングガンであるジェネランチャーのトリガーを引き、無数の銃口を目標へと向ける。

すると、無数の銃口から青い光弾が放たれ、ハガネハンマーに直撃し、その装甲を吹き飛ばす。
「人を信じる心を！！！！」
よろめくハガネハンマーに向かいジェネグリーンは三股の槍―ジェネトライデントを構え、突きによる攻撃を装甲が吹き飛んだハガネハンマーの胴体に放つ。
『ぐううッ！！』
ジェネレッドはハガネハンマーの胴体に突き刺さるジェネトライデントの長い束の部分に乗り、そのしなりを利用して一気に跳躍する。
そして、空高く飛翔したジェネレッドは身動きのとれないハガネハンマーを見下ろし、専用武器である長い両刃の剣であるジェネレイドサーベル出現させた。

「そして諦めない強い心を以って！！俺達はお前を――倒す！！」
落下するジェネレッドはジェネチップをブレスから取り出すと、ジェネレイドサーベルの束の部分に装填した。
［ジェネレイドサーベル・バーストアップ］
ジェネレイドサーベルか流麗な機械音を発すると、その刀身は赤く光り輝く。レッドは自分の体重や落下速度を乗せ、その剣を一気に振り下ろした。

「くらえ！ジェネレイドフラッシュ！！」

動きが完全に拘束されたハガネハンマーを縦一閃に切り裂くジェネレッド。
一刀両断にされたハガネハンマーは、火花を散らし、一気に爆発した。
『ぐあぁぁッ？！』
爆発し、煙を上げて一気に吹き飛ぶハガネハンマーを前に、ジェネ

レンジャーは各々の武器を構える。
『ほう、なかなかやるな、ジェネレンジャー……』
崖の上で戦いを見下していたサバキメデスは静かに瞳を閉じると、霧を体中から放ち姿を消した。
『鋼の使途を倒すとは……』
『まあまあ！次は私の竜の使途の番だから大丈夫よ！！――覚悟しときな、ジェネレンジャー』
にぱっと笑いハガネイティブの肩を叩いたラストラトスは、崖の下を見下ろす。そして一瞬にして氷のように冷たい表情で五人を睨みつけ、刃を向けながらハガネイティブと共にその塲から姿を消した。
――
ファイヤーレッドは、新たなる五人の戦士・ジェネレンジャーを見つめ、静かに近づいた。
「ジェネレンジャーか――――地球を頼んでいいのか？君達に」
ファイヤーレッドが問い掛けると、ジェネレッドが他のジェネレンジャーを背にして駆け寄り、右手を差し出した。
「任せて下さい、地球は俺達が――絶対に守ります」
ジェネレッドは迷いなく、はっきりと決意を宣言する。
背後の四人はリベンジャーと裂子を見つめながら、静かに頷くだけであった。
「頼んだぞ――無限戦隊ジェネレンジャー」
固い握手を交わすファイヤーレッドとジェネレッド、そしてリベンジャーは彼らと崖を背にして、荒れ地を歩き出した。
ファイヤーレッドは一度だけ振り返りジェネレンジャーを一瞥すると、紫色の雲が立ち込める空を見上げた――

「サドンハデス！！貴様達は地球を――人の心と命を奪う事は出来ない！！」

ファイヤーレッドは見上げた空を指差し、その空の先にいるであろう終末に代わる新たなる敵、サドンハデスを威圧するかのように叫ぶ。

そして、今までの全ての想いを回想し、宣言した――

「この地球に――――明日のリベンジャーがいる限り！！」

――――熾烈戦隊リベンジャー・完――――

## 第五部　明日のリベンジャーは君だ（後書き）

作者「これにて熾烈戦隊リベンジャーの全ての話は終了です、読者の皆様方、感想や応援ありがとうございました」

アイン「これで本当の本当に終わりなのか……長かったな」

作者「リベンジャーについては後は加筆修正くらいしかしないです、はい」

アイン「というか、最終回のあとがきなのに……二人だけでいいのか」

北崎「いいわけないだろがッ！！ああッ！！終わっちまったぜリベンジャー！！おい……作者！！続編書け続編！オレの話を作るんダ！！」

作者「うわ！！緑の中の人が来た…」

南条「まあ、俺は逆によくここまで続いたもんだと思うがな……構成のユルさやパスワード忘れたりするミスは未熟としか言えないが」

作者「登場人物なのに作者にひじょーに厳しぃーッ！！」

裂子「そのネタ、多分ここまで読んでる人の全員が知らないぞ」

断児「まあ、いいじゃないか裂子さん！！じゃあ大団円といこうぜ！！」

作者「じゃあ皆さん、一言ずつどうぞ」

北崎「みんな！俺を――俺達を忘れんなよ！！淋しいときには空を見ろ！」

アイン「好きな女がいるなら尽くせ！！報われることもあるからな！！」

南条「これでリベンジャーは終わる、だが、この作品のタイトルのように君が明日のリベンジャーなんだ、だから地球を――せめて身の周りの人を悲しませるなよ」

作者「なんか収まり切らないから、次回に続きます！！」

## 次回作予告

―次回作予告―

企画構想から一年と数ヶ月。
ついに、新たなヒーローが動き出す。

――かつての地球には二つの種族の戦いがあった――

一つは超古代の地球全土にレールを敷き特急を走らせ流通文化を築いた特急文明人。

一つは魔石の力を用いて怪人へと変身する種族であるギゾンド一族の戦いである。

長く激しい戦いの末、全てのギゾンド族は聖なる大地に封印され、衰退した特急文明人は地球すら破壊しかねない自らの技術を封印し、地球上から姿を消した。

そして、我々の直接の始祖であるホモサピエンスが誕生したのである――――

特急戦隊バトルライナー

近日、公開。

あ

## 次回作予告（後書き）

作者「前回のあとがきからの続きです」

断児「みんな、応援（感想とかもろもろ）ありがとう、こんな主人公だったけど、一生懸命にやったから俺には悔いはない――――南条も言っていたが、明日のリベンジャーは君だ、だから守ろう――俺達と一瞬に」

作者「読んでくれた皆様、マジで一年以上の応援ありがとうございました、高浜ゆかり先生の次回作にご期待下さい」

アイン「さあ、次回作を書くのだ作者！特急戦隊だっけか？さあさあ」

作者「特急か、もう一つのモチーフ、どちらかにします、最近自分が書きたいものがよく分からないので、もう少し考えてから取り掛かりたいと思います、うん」

アイン「そうなのか、まあ……今はただよくやった、よくやった」

作者「うむ、さらば、リベンジャー……次回作との共演のときまで、さらば」

――長い間の応援ありがとうございました、帰ってきた高浜ゆかり先生の次回作をご期待下さい―

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1231e/

明日のリベンジャーは君だ

2010年10月10日12時00分発行